

高等学校における共生の心を育む体育授業研究

今城 遥 (愛媛大学大学院)

1. 目的

本研究では、「体力差・能力差」、「性の違い」、「障がいの有無」を題材に生徒の「共生」の心を育む3つの授業モデルを作成し、高等学校体育授業における実践を通して、生徒の男女共同参画の意識や「体力差・能力差」、「性の違い」、「障がいの有無」に対する「共生」の心がはぐくまれたかを検証した。生徒の「共生」に関する捉え方や考え方の変容から、各授業モデルの効果を検証するとともに、これからの「共生」の心を育む体育授業のあり方について考察することを目的とした。

2. 方法

1) 対象と授業のデザイン

授業実践の対象は、E大学附属高等学校第3学年118名とした。本研究者と大学教員で授業を計画し、実践はすべて本研究者がおこなった。

2) 分析の方法

3つの授業実践開始前後に、「体育・スポーツに関する意識」、「共生に関する意識」、「スポーツへの志向性」、「授業の評価」、「障がいに関する意識」の5つの項目に分けて作成した質問紙調査を対象者に実施した。

3. 結果および考察

①体力差・能力差を題材とした授業モデル

授業実践①では、a. 学習過程の工夫、b. 考え方やねらいの明確化、c. 条件を調整するための手立て、d. 試合をおこなう方法に配慮した。体力差・能力差を越えて全員が楽しむための方法を生徒自らが探り、環境、ルール、人数、用具などの条件を変更して力の拮抗した試合を楽しむことを学習させた。その結果、「共生」の心を育む授業を行う上で、競技上の条件設定をおこなったこと、大切にしたい価値観を予め共有したこと、他者との合意形成をとおして共に楽しむ方法を考えたことが確認できた。

②性の違いや個の役割を題材とした授業モデル

授業実践②では、a. 学習過程の工夫、b. 考え方やねらいの明確化、c. 任された役割を果たすための手立て、d. 試合をおこなう方法に配慮した。男女共習の授業において、ファミリー・チーム制を導入し、生徒一人ひとりに役割を持たせたり、生

徒間の応援、アドバイスの促進、個の役割等を工夫して実践した。質問紙調査の結果より、男女共習授業に対する生徒の抵抗感が少なくなり、男女の相互理解、男女共習に対する意識及び男女共同参画意識に変容がみられた。

③障がいの有無を題材とした授業モデル

授業実践③では、a. 考え方やねらいの明確化、b. 障がい者スポーツの競技特性を知るための手立て、c. ねらいを達成するための手立て、d. 試合(交流)をおこなう点に配慮した。質問紙調査の結果より、障がい者スポーツについての意識は、「障がい者と一緒にスポーツしたい」「自分が障がい者だったらスポーツをしたい」「障がい者スポーツは楽しい」「障がい者スポーツは障がい者だけが行うスポーツだ」「障がい者スポーツに積極的にかかわりたい」の5項目で有意な差が認められた。これは、特別支援学校で障がいのある生徒と一緒にボッチャの交流をおこなったことで、障がい者についてのイメージや障がい者スポーツに対するイメージが好意的に変容したと考えられる。

表1 障がい者スポーツに対するイメージ
*: <0.05 **: <0.01

授業参加群	Pre(n=27)		Post(n=27)		t検定	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
A 障がい者と一緒にスポーツしたい	5.2	1.35	5.7	0.94	-2.25	*
B 自分が障がい者だったらスポーツをしたい	5.0	1.62	6.0	1.00	-2.96	**
C 障がい者スポーツは楽しい	5.1	1.44	6.2	0.80	-3.41	**
D 障がい者スポーツは障がい者だけがおこなう	3.4	1.74	1.8	1.00	4.59	**
E 障がい者スポーツに積極的にかかわりたい	5.0	1.45	5.7	0.98	-2.49	*
F 障がい者スポーツのサポートをしたい	5.2	1.45	5.7	0.98	-1.54	

4. 結論

本研究では、「体力差・能力差」、「性の違いや個の役割」、「障がいの有無」を題材とした3つの授業実践をとおして、自分と異なる体力や運動能力、性の違いや障がいの有無だけでなく、今まで育ってきた生活環境の違いやスポーツに対する価値観の違いなど、生徒が他者との違いを感じる機会を持たせることができた。それぞれの違いの中で、体力差・能力差、性の違いや個の役割、障がいの有無を超えて共にスポーツを楽しむ方法を考えることで「共生」の意識を育むことができたと考えられる。今後の共生社会にむけて、本研究の授業モデルの有効性が示唆された。